

卷頭言

寛嚴両つながら存せず

この師走、義正翁ゆかりの方が他界された。牟岐詰雄先生である。先生は昭和八年本校に着任されたが、着任にいたる経緯については、伝記「三田義正」に詳しい。「証文がなにになる！」この大喝一声をまのあたりにされた生き証人であった。

十二月五日、一関市祥雲寺に会葬したが、その折喪主から一幅の掛軸を贈られた。「老愁」と題する先生自作の七絶を自ら揮毫された逸品である。

老愁

父道寛嚴両不存常時待児以甘言

知否人生万里路一夜風雪空挫魂

昭和庚申春 保軒 牟岐士明

どうやら十余年前の作と思われるが、老いてなお変わらぬ先生の体温が伝わってくる。学校はすっかりやれよと叱咤の響きさえ感じる。次に訓読を記しておく。

父道 寛嚴両つながら存せず

常時児を待つに甘言を以てす

知るや否や人生万里の路

一夜の風雪に空しく魂を挫く

ちなみに、先生享年九十四歳。ご冥福を祈る。(H 6—12—18)

学校長 西在家

寛